

6 プロジェクトの推進に向けた課題

6.1 プロジェクト① 石川 IC 周辺の交流拠点形成に向けた課題

沖縄本島の中央に位置し、沖縄自動車道や幹線道路が通っており、石川 IC は市内で唯一の IC となっている。北部や西海岸を訪れる観光客も多い一方で、石川 IC で降りた観光客は恩納村へ素通りしており、市内への誘客や立ち寄りを充分に取り込めていない状況にある。

石川多目的ドームで行われる闘牛大会は年間を通して一定の集客（全島大会では 3,000 名以上）はあるが、既存市街地への周遊による消費の促進に至っていない。石川多目的ドームは闘牛以外の興行での利活用の余地があるものの慢性的な駐車場不足が課題である。

石川地区社交街には様々な飲食店等が集積し、地域の西側には自然を活かした観光スポットが存在するものの、各地に点在しているため面的なつながりは不十分であり、その集積を活かした認知度の向上が課題である。

そのため、石川地域の玄関口（ゲートウェイ）としての立地を生かし、ワンストップする立ち寄り地を形成し、石川地域やうるま市内の魅力を新たな形で発信し、地域への来訪のきっかけを創出することが必要である。

6.2 プロジェクト② 石川庁舎周辺の利活用推進に向けた課題

石川庁舎周辺の背後地には、コンパクトな市街地に生活利便施設や飲食店が数多く集積しているものの、石川庁舎の駐車場は夜間に閉鎖しており、現状で市街地と石川庁舎周辺との関係性は低い。

石川庁舎周辺では既存公共施設の老朽化が進み、公共施設マネジメントの観点から再編が必要な状況であり、また、石川公園・石川ビーチ・ふ頭用地は海沿いの立地を活かした更なる利活用や適切な維持管理が望まれている。

そのため、石川庁舎周辺の立地ポテンシャルと地域資源を活かして、新たな魅力ある賑わい拠点を形成して、石川地域の市街地やうるま市内への滞在・周遊を促し、地域活性化を図ることが必要である。

7 石川地域の将来像、まちづくりの基本方針

広域的条件、上位・関連計画における位置付け、対象地域の特性・資源（シーズ）、利用者ニーズ、事業者ニーズを踏まえ、石川地域の将来像及びまちづくりの基本方針を示す。

7.1 石川地域の将来像

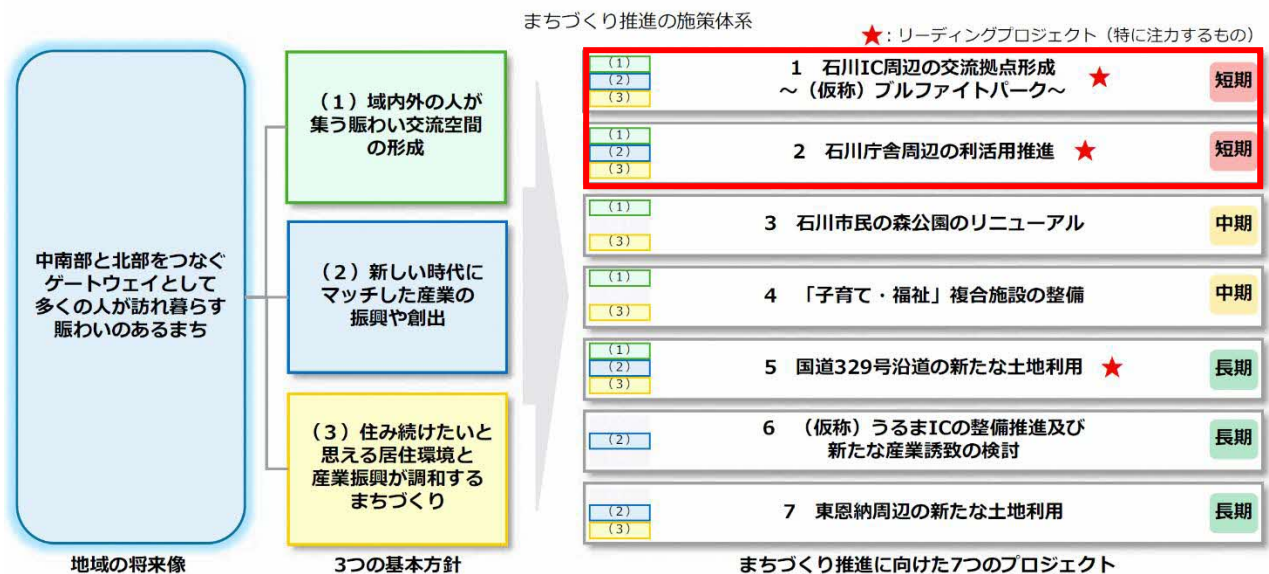
「石川地域まちづくり推進計画」における石川地域の将来像「中南部と北部をつなぐゲートウェイとして多くの人が訪れ暮らす賑わいのあるまち」を踏まえ、石川 IC 周辺及び石川庁舎周辺のまちづくりの基本方針を以下に示す。

◆ 石川地域の将来像

中南部と北部をつなぐゲートウェイとして 多くの人が訪れ暮らす賑わいのあるまち

石川地域は、沖縄本島においては中南部と北部をつなぐ位置にあり、市内で唯一の沖縄自動車道ICが立地する地域であることから、位置関係や交通アクセス面のポテンシャルを高く評価する声は多く聞かれています。また、生活利便性や暮らしやすさ、産業集積等を石川の特長として挙げる意見も多く把握されています。一方、観光や余暇を過ごすことを目的に石川地域を訪れる人は、それほど多くないと考えられます。しかし、魅力ある既存の観光施設や、十分にポテンシャルが発揮されていない施設・エリア等の地域資源も多く存在しています。

位置やアクセス性といった強みを生かしながら、観光、産業、居住等の多面的な魅力向上を図り、県内外から多くの人や企業、団体、学術・研究機関等を引きつけ、将来にわたる発展につなげたいとの思いをこの将来像に込めています。将来像の実現に向けたまちづくりを推進し、石川地域、ひいては市全体の経済活性化への波及を目指します。



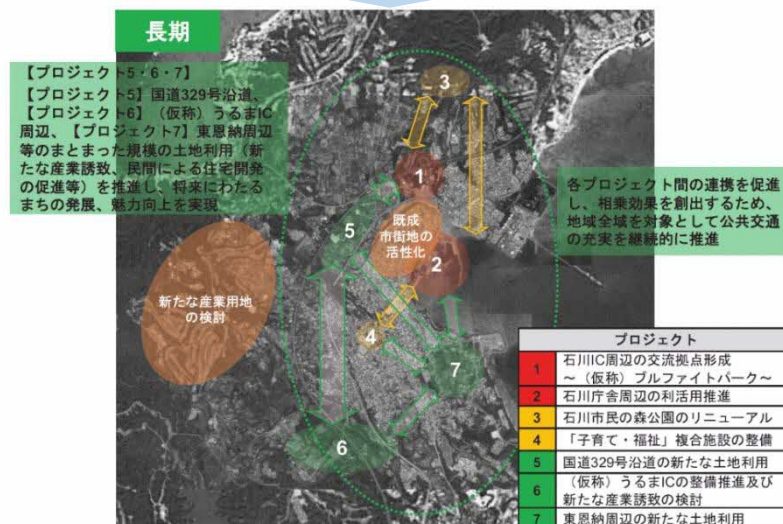
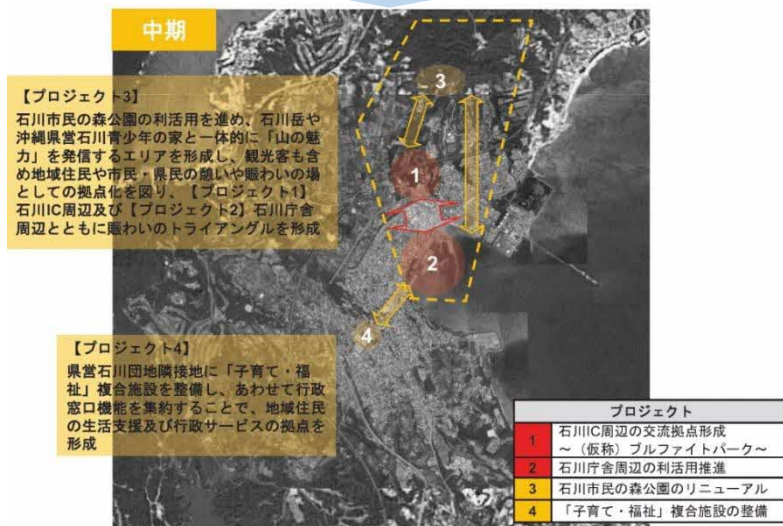
【石川 IC 周辺及び石川庁舎周辺におけるまちづくりの基本方針】

石川の資源を活かした地域の魅力の発信、来訪魅力の強化 ～ゲートウェイとしての強いインパクト(求心力と波及力)を創出～

- ・ 沖縄本島のみほそに位置し石川 IC が立地するポテンシャルを最大限に活用
- ・ 域外からの来訪魅力を強化(観光、レジャーから感動産業へ)
 - 地区の魅力を発信し、立ち寄りのきっかけと動機を創出
 - 石川地域らしさを育み・体感できる居場所を創出し、地域への愛着醸成(シビックプライド)、石川地域のブランド力のアップ 等
 - 既成市街地への周遊を促進(一体的なロビー機能)

7.2 段階的な事業展開の考え方

「石川地域まちづくり推進計画」において、プロジェクト①石川 IC 周辺の交流拠点形成、プロジェクト②石川庁舎周辺の利活用推進は、短期のリーディングプロジェクトに位置付けられていることから、2つのプロジェクトが連携して石川地域への立ち寄りのきっかけや目的となる拠点の形成を目指し、中期・長期のプロジェクトの展開への礎を築く。



出所：国土地理院地図（写真）及びうるま市所有の航空写真を加工して作成

7.3 プロジェクト①・②の理念及びターゲット

(1) プロジェクト①・②の理念

「石川地域まちづくり推進計画」における位置付けを踏まえ、石川地域の立地ポテンシャルや地域資源、歴史的経緯等を踏まえ、プロジェクト①・②の理念を以下のように設定する。

—市民、県内来訪者、県外観光客が交わり、遊び、憩い、感動する—
『地域の宝を活かした新たな石川地域をリードするサステナブルな拠点』

- 7つのプロジェクトのうちの「リーディングプロジェクト」かつ「短期施策」であり、将来の石川地域のまちづくりを始動するにあたっての象徴的な成果を導出する。
- 沖縄本島のみほそに位置し石川ICがある立地を活かし、対外的なインパクト（県外観光客・県内来訪者）を与えつつ、暮らす市民にとっての経済波及・利便・まちへの意識醸成等の効果をねらう。
- 戦後復興のはじまりの場としての文脈、連綿と培われてきた歴史・文化・娯楽、石川地域の資源等を最大限に活用し、他にない魅力を創出する。（このことが、持続可能な活力形成につながる）
- プロジェクト①、②及び既成市街地が、一体的に共通する理念のもと取り組みを展開し、石川地域としてブランディングを醸成し、シビックプライド（市民性、愛着）を次世代へとつないでいく。

(2) ターゲット




プロジェクトの効果を享受する対象（ターゲット）として、市民、県内来訪者（県民）、県外観光客の3者を想定する。市民は対象地域周辺を熟知しており、日常的な活動の中でプロジェクトと様々な関わり方を持つことが期待される。県内来訪者は、沖縄自動車道等を利用して、週末の来訪など、比較的容易に高頻度での来訪が期待される。県外来訪客は、沖縄へ訪れる観光客がうるま市石川地域を訪れ、滞在し、リピーターにつながることを期待する。



(3) プロジェクトによるインパクトとターゲットの関わり

県外観光客、県内来訪者に対してプロジェクト①・②が与えるインパクト（効果）を下表のように想定し、ニーズや行動特性を踏まえて、様々な形でうるま市石川地域の魅力や情報を提供し、来訪するきっかけと動機を創出する。

市民は、プロジェクト①・②の利用者でもあり、かつ、県外観光客や県内来訪者を受け入れ交流する中で、「感動産業特区」としてうるま市石川地域の魅力や楽しみ方を伝え、訪れる人に共感や感動を生み出す担い手（プレイヤー）としても、プロジェクト①・②への様々な関わり方を期待する。

変化する人の動き (ターゲット)		与えるインパクト(効果)	市民の関わり (石川地域住民等) 
県外観光客 	沖縄自動車道等を通る	休憩・食事等の短時間滞在の際に、情報提供 ・ 石川・うるまの歴史・文化、観光等の魅力を売り込み ・ 立ち寄り・次回の来訪のきっかけづくり	石川地域の魅力を来訪者に伝える ⇒地域の文化・歴史の再認識
	近隣・恩納村に滞在	石川地域の資源の強みを活かした来訪 ・ 既成市街地への夜の来訪 ・ 旅程中での新たな立ち寄りの提案	増加する来訪者(観光客)を受け入れ ⇒収入の増加 ⇒新たなビジネスのチャンス
	リピーター・次回以降訪問	立ち寄り(半日・一泊程度)の際に石川・うるまファンづくり ・ エンターテインメント、創作等の魅力の提案	増加する来訪者(滞在者)を受け入れ ⇒滞在者との交流 等
県内来訪者 	余暇・レジャー	沖縄県民の余暇・レジャーの場 ・ 公園・ビーチ、屋内遊び場、屋根付きスペース等への定期的な来訪	市民にとっての憩いの場、居場所の創出、利便等の向上、 ⇒集客施設や自然資源等の一般利用の促進 等

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

(4) プロジェクト①・②による人の流れのイメージ

プロジェクトによるインパクトとターゲットの関わりを実現した際の人の流れのイメージを下図に示す。

そのために必要となるプロジェクト①・②の役割として、プロジェクト①石川 IC 周辺については「石川地域へいざなうまちのワンストップロビー」、プロジェクト②石川庁舎周辺については「石川らしさを育み、体感できる滞在・交流拠点」としての機能を持たせる。

